

巻頭言

コンピテンシー育成開発研究所
比較日本学教育研究部門長

神田 由築

本学は、明治8（1875）年に「東京女子師範学校」として設立されて以来、「女子高等師範学校」、「東京女子高等師範学校」を経て、昭和24（1949）年からは新制大学「お茶の水女子大学」となり、来たる2025年に創立150周年を迎えます。

比較日本学教育研究部門は、国際的・学際的な情報ネットワークの拠点の形成を目的として、前身である機関が平成16（2004）年に発足しました。今年度は、従来通り、海外協定校との協力関係を維持しながら日本研究のネットワークを構築することに努めるとともに、本学が創立150周年を迎えるに先立ち、あらためて「すべての女性に、国籍・年齢などにかかわらず自立した女性として活躍できる場を提供する」という役割を意識しながら、活動を進めてまいりました。

大きな行事としては、7月の国際日本学シンポジウム、11月の国際日本学コンソーシアムの開催に加えて、5月と12月に国際日本学講演会を開催しました。いずれもオンライン開催でしたが、多くの方々の御協力のおかげで、多数の視聴者に御参加いただくことができました。この場を借りて、御協力たまわりました皆様に、あらためて御礼を申し上げます。

第25回国際日本学シンポジウムは、7月1日（土）に開催しました。「わたしにお茶大がくれたもの—あなたにとってはなんですか？—」と題して、本学に学ぶ（学んだ）一人一人の「わたし」を主人公に据え、「わたし」の視点から本学（あるいは女子大学）という存在について考えてみました。また、本シンポジウムは、当部門が昨年度からコンピテンシー育成開発研究所に所属することになったことも踏まえています。本学でいうコンピテンシーとは、「社会的な場において成果を上げる資質・能力」を指していますが、こうした「資質・能力」にあたる批判的思考や協働性、問題解決能力などは、これまでも卒業生一人一人の経験値や実践知として蓄えられてきたものです。本シンポジウムでは加藤厚子氏・和田華子氏・芹澤良子氏による問題提起ののち、様々なバックグラウンドがある五名の卒業生（仲田秀氏・丸田孝子氏・范淑文氏・土屋由里子氏・原容子氏）にパネル報告をいただき、その豊かな経験値や実践知に学びを深めました。さらにパネルディスカッションでは、視聴者に事前に行った二つの質問に対する回答結果をもとに、女性を取り巻く環境や女子大学の特徴などをめぐる議論が行われました。

第18回国際日本学コンソーシアムは、11月4日（土）に開催しました。今年度のテーマは「日本文化の中のバーチャル」でした。これは、大学院科目「国際日本文化論」の受講者からテーマ案を募集し、院生どうし、および部門の教員間で投票を行って選んだものです。今年度は19の案から選ばれました。これを提案した院生は、とある番組で、バーチャルYouTuberの「中の人」が、「中の人」と「アバター」の関係を、人形浄瑠璃における「黒子(人形遣い)」と「人形」に例えているのを見て、それは「命のない人形の背後にある人間の存在は自明でありながらも、観客はそれを意識的に無視して、操られる人形を仮想的な生命と見なしているという意味だ」と考えたそうです。こうした「バーチャル」という切り口は、演劇だけでなく文学や言語の分野にも

敷衍することが可能で、ひろく日本文化の特徴を考える立脚点となりえます。また、分野によって多彩な景色を見せてくれることも期待されます。そういう点が評価され、今回のテーマとして選ばれました。今年度は協定校の台湾大学、北京外国語大学・北京日本学研究中心、パリ・シテ大学の3校から11名（教員4名、院生7名）の教員・院生をお迎えし、本学からも6名の教員・院生が参加して、日本語・日本語教育部会、日本文学部会、日本文化部会の三つの部会を開催しました。その結果、様々な視点から「バーチャル」を捉えた、バリエーションに富んだ報告が揃いました。御協力をたまわりました協定校の皆様方、そして部門の先生方に御礼を申し上げます。

また、第6回と第7回の国際日本学講演会では、「『研究』と歩き回る」と冠する企画を立ててみました。これは、若手の研究者をお迎えして、研究の道に入った経緯や研究を進める過程での経験談などを楽しく語っていただき、学生や院生に研究の世界の広がりや可能性を実感してもらうことを目的とする試みです。第6回は5月20日（土）に開催し、日本文学の分野から森暁子氏に「日本文学からあちらこちら」との副題で御登壇いただきました。第7回は12月16日（土）に開催し、社会心理学の分野から堀内由樹子氏に「心理学と私」との副題で御登壇いただきました。お二人とも、語りの内容もさることながら、非常に魅力的な話術をお持ちで、参加者にも大変好評でした。本誌の講演録からも、その闊達なお話ぶりがうかがえるのではないかと思います。この「『研究』と歩き回る」はシリーズ企画として、今後も続けていこうかと考えています。

それから今年度は、コンソーシアムの朱桂栄氏、彭子燕氏、楊鎔溪氏の報告内容に関連する論文一本と、投稿論文一本を掲載いたしました。

当部門では引き続き、本学のミッションに基づき、国際日本学の新たな可能性を追求してまいります。

どうか今後とも、よろしくお願い申し上げます。

2024年3月